

東北応援ツアーに参加して

昭和 62 年文学部卒

白石麻由子

「何もない」

これが、今回東北を訪問して一番強く感じたことだった。

街に人がいない。歩いていない。きれいな青空、その色を映した青く透明な海。

きれいな景色はある。が、そこに暮らす人々がいないのだ。

もちろん、暮らしの息吹も、そこにはない。

津波が全てを奪い去った街には、もう行くところがないのだろう。だから、人が歩いていない。

陸前高田で見た、駅前広場をかるうじて推測できるロータリーから街の中心部の丘へ伸びるまっすぐな道。そこには街一番の商店街もあったという。しかし、今となっては以前の写真がなければそれすら推測不能である。語り部の方の解説なくしては、「かつてそこに何があったのか」「津波に何が奪われたのか」私たちにはわからない。

その事は、東北をマスコミが取り上げなくなったように「風化」「忘却」にそのままつながっていく。風化や忘却の先に「復旧」も「復興」もない。

ツアー参加時の初めの挨拶で「私たちにまずできることは、忘れないこと」と表明したが、参加後にこの思いが一層強くなったことは言うまでもない。

震災から 2 年半経っても、復興の兆しは何一つ見えていなかった。

こんなにも立ち遅れていることに、政治（政府）の無能さ、東北の方たちの無念さ、自身の無力感などやり切れない思いを次々に感じた。それどころか、雑草だけが青々と元気に生え、荒涼と広がる原野や地盤沈下で住めなくなった場所にできた沼地を見た時「本当は何もかもなくなってしまったのだ」という事を実感した。

大切な人、帰れる場所、懐かしい景色、思いを馳せるふるさと・・・それらは全て、人が人らしく生きるために必要なかけがえのないものなのに、それらを失った喪失感とは、どれ程のものだったのだろう。そう思うと、ますますやり切れぬ思いが心に広がる。

私たちは、毎日こんな風に気楽に暮らしていいのだろうか。こんな思いが参加のきっかけだった。ツアー参加後も日々問い続けている。東北の人々が、少しでも幸せに暮らせる為に、私たちに何ができるのだろうか。

近道の一つは、やはり観光だろう。地元の農水産物や工芸品、お土産を買うことで直接現金を落とすことができる（募金も悪くないが、使いみちが不明だったり間に団体が入ったりで、届いているかどうかはわかりにくい）。

地元の人と触れ合い、様子を直接感じ取り、その後何か考えるきっかけを私たちはもらえ

る。東北の皆さんには外の立場の私たちが喜んで買い物をする嬉しそうな様子が伝わることで、気持ちが連鎖したり伝わったりすることで、少しでも元気になってもらえたら、こんなに嬉しいことはないと思う。

団体がお金を落とすことは個人の「塵も積もれば・・・」よりは大きな現金収入として潤うことにもなるのではないか。こんな地道な積み重ねがその先で実を結ぶのではないか。

今回のツアーは、1月に建立された慰霊碑を訪問して黙祷を捧げたり、旅のしおりに「悲しみから脱することができていない人々へ配慮して行動するに」と記載があったり、と他人事としない立ち位置が感じられ、母校の取り組みを誇らしく思った。

しかしながら、悲しみや喪失感は時間が経つほど深くなってしまうこともある。復興が遅々として進まず、事態の打開もままならぬこんな状況では尚更だ。東北の人々のメンタルケアも本当に気がかりである。

6年ほど前、広島で直接お会いして話を聞いた被爆者の方の言葉を思い出した。「伝えなければいけないと思っているが、話をした後はいよいよ数日間寝込んでしまう。」

原爆から70年近く経つのに、それ程重くのし掛かる負のエネルギー。おそらく、震災を経験した東北の人々も同じような苦しみと付き合うことになるのではないだろうか。

人々の苦しみや悲しみを代わることはできないし、癒すことも難しい。でも、私たちが関わることで、少しだけ悲しみや苦しみを忘れる時間を持てるかもしれない。そういう時間の積み重ねが、人々の助けや支えになれば、こんなに嬉しいことはない。

来年以降も、できる限り東北へ旅する機会を作ろうと思う（応援ツアーには参加できなくても）。今回の1泊2日の短い時間の中にも、素晴らしい出会いがたくさんあった。

岩手県校友会の皆様には本当にお世話になった。この場を借りて厚く御礼を申し上げるとともに、またお会いする機会を作れたら、と強く思う。

全国の校友の皆さんとも知り合えた（皆さん、流石意識の高い方ばかり）。阪神大震災経験者の方も何人か居られ、印象的なお話も聞くことができた。大槌町の刺し子プロジェクト（製品は本当にかわいい！）も応援を継続していきたい。

全国の校友の皆さんに声を大にして伝えたい。この「東北応援ツアー」に一人でも多くの方の参加をお勧めしたい。そして、このツアーの継続こそが、長く東北の応援活動として価値あるものとなる。団体で、しかも大学というアカデミックな立場で触れ合い、発信する力は計り知れない。

今回、大船渡市役所勤務の校友の方に「今の一番の問題」（家が建たないことだそうです）を伺うことができたり、先述の「刺し子プロジェクト」では地域の女性たちが「やることがない」状態から、どう気持ちを切り替えてプロジェクトが形になって行ったのかを聞く

こともできた。翌 2 日目の「遠野まごころネット」の方には「現在は、瓦礫の撤去などではなく、復興のための農作業支援がボランティアのメイン」という実情を教えていただき、バスガイドさんからのためになる「地元ネタ」もたくさん提供していただき、2 日間は非常に濃い「学び」の経験ばかりだった。

来年も応募して、当選したら絶対にまた参加しようと思っている。未曾有の悲劇を忘れず、悲劇に遭遇した人々にできることを考え、次の世代に伝えていくために。

以上